



監督・脚本：ライリー・ステ
アンス

出演：カレン・ギラン／アー
ロン・ポール／ビュー
ラ・コアレ／テオ・ジ
ェームズ

デュアル

2022年／アメリカ映画

配給：アルパトロス・フィルム／95分

2022（令和4）年10月15日鑑賞

シネ・リープル梅田

みどころ

「カレン・ギラン×カレン・ギラン」「敵はもう1人の自分——。」「同じ顔。同じ体。同じ能力。違うのは、瞳の色だけ。」チラシに躍るそんな文句は一体ナニ？さらに、「オリジナル《人間》VSクローン《複製》 生き残りを賭けた決闘裁判！！」とは？

リドリー・スコット監督の『最後の決闘裁判』（21年）は、妻の強姦（？）を巡って行われたもので、弁護士の私には違和感があったが、本作はSFスリラーだから、違和感はそれ以上！

リプレースメント（継承者）の必要性を解く脚本に説得力がないのは残念だ。さて、本作の出来の良し悪しについてのあなたの判断は・・・？

——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*

◆サンダンス映画祭への出品作や受賞作は、低予算ながら個性的で野心的なものが多い。本作のチラシの表には大きく「カレン・ギラン×カレン・ギラン」の文字が躍り、銃を持ったカレン・ギランと、斧を持ったカレン・ギランの両者が写っている。そして、その下には「オリジナル《人間》VSクローン《複製》 生き残りを賭けた決闘裁判！！」の文字が躍っている。こりゃ面白そう！こりゃ、必見！

◆さらにチラシの裏には、「同じ顔。同じ体。同じ能力。違うのは、瞳の色だけ。」の見出しの下に「5種類の武器を5秒で選択。決着は、片方が死ぬまで——。」の文章が。そんな、“ハリウッドのニューヒロイン” カレン・ギラン主演のSFスリラーは必見！

◆私はリドリー・スコット監督の『最後の決闘裁判』（21年）（『シネマ50』117頁）を観てはじめて、中世ヨーロッパでは、妻の強姦（？）を巡って“決闘裁判”が行われていたことを知ったが、本作にはそれとは全く異質の“決闘裁判”が焦点になるので、それに注目！

本作冒頭、多くの観客が見守る中、わけのわからない決闘の姿が紹介されるが、これが本作のいう決闘裁判だというのがわかるのは、ずっとストーリーが進んでからになる。

◆昨年10月の組閣当初は順調だった岸田文雄内閣は、1年を経た今、政策面についても少しずつ“化けの皮”が剥がれてきた上、旧統一教会問題への対応のあまりのデタラメさによって、支持と不支持が逆転している。そんな中、浮上している1つの政策が“リスキリング”だが、本作では“リプレイスメント（継承者）”なるキーワードが登場するので、それに注目。

これは「余命わずか」と告げられたヒロインのサラ（カレン・ギラン）が、死期を悟ったものが遺族を癒すために自分のクローンを作り出すというプログラム＝「リプレイスメント（継承者）」の利用を決意するというストーリーの中で登場する。しかし、それって一体ナニ？

◆クローン（複製）は既に聞き慣れた言葉になっているが、本作ではクローンで作られたサラは“ダブル”と表現される。しかし、リプレイスメント（継承者）を残すことを決意したのは、サラのはず。しかして、なぜ敵はもう1人の自分となり、カレン・ギラン×カレン・ギランの生き残りを賭けた決闘裁判になってしまうの？その顛末は、あなた自身の目で、しっかりと。

2022（令和4）年10月24日記